

エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



パラグアイ日系社会とアスンシオン日本人学校の絆を結ぶ AG5プロジェクト

パラグアイ現地コーディネーター 平岩佐江子

南米大陸の真ん中に位置し、「南米のハート」と称されるパラグアイ共和国。現在の人口はおおよそ735万人（パラグアイ国家統計局、2021年推計値）ですが、1980年までさかのぼると318万人（世界銀行のパラグアイ国データ）。ここ数十年でパラグアイは人口が倍以上に増加し、首都アスンシオンでは新市街を中心に建設ラッシュ、交通量も格段に増えていきます。AG5プロジェクト最終年度を迎える今、グローバル化と近代化が急速に進むパラグアイで、「日本語を学ぶ意義」として「日本人がかつてパラグアイにやって来た史実から学ぶ『移住学習』を進める意義」とは何かを考えてみます。

パラグアイの日本語教育事情

現在パラグアイにはおおよそ七〇〇人の日系人がおり（二〇一七年日系人口センサス）、パラグアイ国内にある九校の日本語学校（以下、日語校）では、今年度は六五〇人ほどの児童生徒に対して、平日の午後や土曜日の授業が行われています（二〇二一年現在、チャベス日語校は休校中）。その他、非日系児童が多く通う私立学校（日本パラグアイ学院、ニホンガッコウ、三育学院）でも日本語が学ばれています。

日本からは一番遠い、地球をぐるりと半周した反対側にある国で、三歳児クラスから「あ・い・う・え・お」を学んでいたり、小学生や中学生では日本語能力試験や日本語スピーチコンテストに挑戦したりする子どもたちがたくさんいるのです。私の子どもたちもパラグアイ生まれの日系人として、アスンシオンの日語校に通って日本語を勉強しています。

戦後移住者が多く、日系一世の方々がまだまだご健在のパラグアイ日系社会では、総じて日本語レベルが高いと言われています。しかし二〇二一年には日本人移住も八十五周年を迎え、世代交代が進む中で日本語教師でも二世、三世の方が多くな

り、児童生徒は三世、四世の世代へと移り変わってきています。

パラグアイ現地のスペイン語学校の教育内容も充実してきており、以前は半日だったスペイン語学校も全日になるなど、スペイン語に触れる機会が増加し、家庭でのスペイン語の使用率も高まっています。

日本語を何とか継承していきたいという保護者や先生方の切なる願いは、時代の変遷とともにますます難しくなってきていると言えます。

日本語学習、移住学習の意義

日系人の子どもたちにとって日本語や日本文化を学ぶことは、自分自身のルーツを学ぶことにはかなりません。そして、スペイン語と日本語の両方が話せるバイリンガルになれば、未来への大きな投資となります。

グローバル化が進む現在では、人やモノの移動が昔に比べてはるかに簡単になりました。子どもたちがパラグアイと日本を行き来する機会も、これからたくさんあるでしょう。そんな今日だからこそ、単なる言語としてではなく、自分自身のアイデンティティを形成する一部として、日本語を学んでほしいと思います。また、はるか昔に祖父母世代が体

験したパラグアイへの移住について学習することは、自分たちの今の暮らしの成り立ちを理解することにつながります。

私が初めてパラグアイにやって来たのは二〇一一年で、こちらに住んで足掛け十年が経ちますが、その間日本人であることで不利益を被ったり、あからさまに差別されたりした経験はまったくありません。

誠実で勤勉な日本人は、パラグアイでは敬意を持たれており、その立役者は開拓者としての日本人移住者なのです。

過去にどのような移住の歴史があり、そこにはどんな苦労や努力が隠れているのか、パラグアイ社会に受け入れられるために日本人がどのような貢献をしてきたかを、ぜひ学んでもらいたいです。そのような文脈で日本語学習や移住学習を進めるのはとても意義があると思っています。日系児童生徒たちは、まったく異なる価値観、言語、文化を子ども頃から自然に体験できます。パラグアイと日本両方の文化を知る日系人は、両国をつなぐ架け橋になれる存在だと思っています。それはアスンシオン日本人学校（以下、日本人学校）で学ぶ児童生徒にも、同じことが言えます。

移住学習教材 「パラグアイ移住かるた」

AG5プロジェクトでは、日本人・日系人の子どもたちが日本人移住の歴史について楽しく学べるような教材を多数開発してきました。

二〇一八年に「パラグアイ移住すごろく」、二〇一九年に社会科副読本『わたしたちのパラグアイ第三版』、二〇二〇年に「パラグアイ移住かるた」と『わたしたちのパラグアイ第三版 活用事例集』を作成しましたが、このうち、特に思い入れのある「パラグアイ移住かるた」についてご紹介します。



上り坂 天秤担ぎ 水運び
移住当時、生活用水は井戸にたよっていました。毎朝早くから天秤にバケツをつぶのり下げて、町往復も水を運んであった人は、重い水を担いで井戸から家まで上り坂を登っていかなければなりません。

El agua que utilizaban en la Vida Cotidiana se valía del Pozo. Tenían que transportar varias veces con 2 baldes a cuesta para llenar el tanque de la casa. Los que vivían en la arribada del Pozo, debían subir las pendientes varias veces cargando los Baldes de Agua.



読み札の川柳は、すべて日系人の方々や、日系の児童生徒の作品です。その多くは、パラグアイ日系老人クラブ連合会が実施しているシルバー川柳コンクールの応募作品の中から、移住に関して詠ま

れた句を使用させていただいたものです。アスンシオン日語校の児童生徒の作品もあります。ご家族も手伝われて、楽しんで詠んでくださったそうです。

さらに、アスンシオン日語校の関尚子校長先生のお母様の関淳子先生が、有志としてたくさん句を詠んでくださいました。一九三六年八月十七日にラ・コルメナ移住地に最初に入植された十一家族八十一名の一人、移住当時一歳半だった方です。どの句も、ご自身やご両親の体験を心豊かに詠まれており、その当時の情景が心に思い描ける素晴らしい作品だと思えます。

絵札は、昔の写真を使いました。すべての移住地から写真を集めるようにしたこと、白黒の写真ばかりにならないよう、半分ほどはカラー写真にしたことがポイントです。ジャングルに潜んでいたというジャガーの写真や、移住地に向かう移住者たちが乗った昔の汽車の写真といった、子どもたちの興味を引きそうな写真も入れました。

写真集めにも、パラグアイ各地の皆様のご協力をいただきました。パラグアイ日本人会連合会をはじめとして、各移住地の日本人会、各日語校の先生方、イグアスやピラポの移

住史料館や農協、そして有志の方々から、当時の貴重な写真をご提供いただきました。中でも、ラパス移住地にお住まいの渡辺稲子先生は、扮装したり、生徒さんに演技を依頼してくださったりして、当時の様子を再現した写真を何枚も撮影してくださいました。

絵札の裏面には易しい日本語で解説文を付けて、漢字にはルビをふりました。日本人学校に加藤雅亮前校長先生が丁寧に文章をチェックしてください、内容についてはパラグアイ日本人会連合会の菊池明雄事務局長と、作成当時パラグアイ日系老人クラブ連合会事務局長をされていた山西司朗さんが詳細にご確認ください。

もう一つの工夫は、スペイン語の翻訳を付けたことです。これで日本語が得意な子どもでも内容がわかるようになっていきます。

シルバー川柳コンクールの応募作品から使わせていただいた川柳では、多少難しい表現のものもあります。ですが、解説文とスペイン語翻訳を付けたことで随分使いやすくなったのではないかと思います。翻訳は、アスンシオン日語校の関尚子校長先生が担当してくださいました。

二〇一八年に日語校と日本人学校

の子どもたちが移民について学べるようにとの思いで「移民すごろく」を作成したときには、ほぼ日本人学校教員だけで制作したため、日語校や日系社会を巻き込んだ作業にならなかったのが反省点でした。かるたの制作では、コロナ禍にもかかわらず、非常に多くの方々の助けをいただきました。日本人学校と日系社会の皆様とで「ともに作り上げた」制作物である、と私は思っています。

完成したかるたは、各日語校や関係各所、そして写真をご提供くださった方々に配付しました。たくさんのお礼のメッセージをいただき、非常に好評をもって受け入れてくださったと嬉しく感じています。祖父母世代から、子ども・孫世代に移住の体験を説明してあげられるようなイメージで作ったので、ぜひご家庭に貸し出すなどしていただきたいと思います。パラグアイでは現在も対面授業が完全には再開していないので、なかなかかるたを使って思うように遊ぶことはできません。そのため肝心の児童生徒の反応がまだまだ見えない段階ではありますが、アスンシオン日語校では弥政まなみ先生がアプリを駆使してオンライン授業でかるたを使用してくださいました。生徒さんたちは楽しんで遊んでく

れたそうです。「このかるたは買えないのか？」と聞いてきた子どももいたそうなので、反応は上々と言えそうです。対面授業が全面的に再開するであろう来年度以降には、パラグアイ各地で活用していただけることを願っています。

本校における「移住学習」

日本人学校を「日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のための拠点にしていく」というAG5の取り組みでは、パラグアイに生まれ育った日系人の子どもたちや、彼らを教える日語校の先生方への教師研修に重きが置かれています。

しかし最終年度となる今年は、そこに日本人学校の児童生徒たちに対する「移住学習」が加わりました。「パラグアイにおける日本人移住」をテーマに、一、二年生を除くすべての児童生徒が、グループ別または個人で、日系移住地についての調べ学習を行うことになったのです。それが「生きた学習」になるよう、移住地などにお住まいの日系人の方々へのインタビューを必ず含めています。小学五、六年生グループでは、自分たちと同年齢くらいの日系人の子どもたちが昔の移住についてどう考えているのかを知りたいという思い

から、イグアス日語校の子どもたちに対してオンラインでインタビューを実施しました。

「移住してきた様子、苦勞の話を聞いたことがあるか」という質問のほか、「日本語を勉強するのはなぜか」、「家庭内では何語で話しているか」、「日系人でよかったこと、困ったことはあるか」などの質問が聞かれました。イグアス日語校からも、「日本のどこの出身か」、「どんなアニメを観ているか」といった質問が寄せられ、オンライン交流のような楽しい雰囲気になりました。

過去の日本人移住とは時代が異なりますが、日本人学校に通う児童生徒も言わば「移住者」です。日本から外国へやって来て、困った経験が

あったり、日本人であることを強く意識することがあったり、またはアイデンティティの変容を感じていたりするかもしれません。日本人移住の歴史や、移住地の今について学びながら、自分自身を振り返るきっかけにしてみたいと思います。

持続可能な形での支援・交流の継続を願って

二〇一七年より始まったパラグアイでのAG5は、今年で五年目の最終年度を迎えました。この五年間で、本校と日系社会とのかわりは格段に増えました。日系社会での日本人学校のプレゼンスを高めたこと、日本人・日系人の移住の歴史を学べる副読本などの教材の作成ができたこととその活用方法を示したこと、日本人学校の教員による出前授業をはじめとした教員研修を実施し、好評を博したことを考えると、AG5を通して支援と交流の絆が確実に強くなっているのがわかります。

多くの反省点や課題もあります。その一つが、事業終了後にどのような日語校に対する支援を継続できるかということです。今後もぜひ授業公開や出前授業を継続し、日本の学校文化を発信し続けてほしい、そして日系社会との絆をつないでい

ってほしいと思います。

コロナ禍では様々な事業が中止や余儀なくされましたが、一つ大きな発見だったのは、遠隔地ともオンラインで簡単につながれるのがわかったことです。合同研修会と出前授業は毎年好評をもって受け入れていただいています。昨年度、今年度の出前授業はオンラインで実施しました(今年度はアスンシオンだけでなく、エンカルナシオン日語校に対してもオンライン出前授業を実施)。

今後、アスンシオンから遠く離れた移住地の学校に対してのオンライン出前授業や、児童生徒同士の交流といった可能性を持続可能な形で模索してほしいです。

最後に、日本人学校の現校長の道藤祐司先生、前校長の加藤雅亮先生、元校長の田口克敏先生の素晴らしいリーダーシップ、アスンシオン日語校の関尚子校長先生の多大なるご協力、AG5担当の金元弘子先生の深いご献身在、アスンシオンでの事業をやりあるものにしてくださったと、深くお礼を申し上げます。さらに、日本からいつもご支援くださる森茂岳雄教授、見世千賀子准教授、拝野寿美子准教授、そして海外子女教育振興財団の中村雅治相談役とご担当の方にも心より感謝いたします。

